

称号及び氏名	博士（言語文化学）	旅田 孟
学位授与の日付	2018年3月31日	
論文名	説話集成立についての考察—『古今著聞集』の分析を中心として—	
論文審査委員	主査	田中 宗博
	副査	青木 賜鶴子
	副査	西田 正宏

論文要旨

本論文は、建長六年（一二五四）に橘成季という官人によって編纂された説話集『古今著聞集』を主な考察対象とし、説話集が成立するに際して、説話がいかなる経路から収集されるのか、収集された説話はいかなる方法によって一説話集となるのかについて考えるものである。加えて『著聞集』以外の説話集および物語・軍記にも目を向け、そうしたテキストの中に見える特定の表現がいかなるイメージを伴って使用されていたのかについても考える。そうした微細な事柄について正しく捉えられていないことには、各説話とその説話の集積体である説話集の成立などというより大きい事柄についての、十全な理解にまで到達しえないと考えるからである。

第一部は「説話の取材源」と題し、『著聞集』に収録された説話がいかにして編者である成季のもとに集まったのかを探っていく。

第一章「橘成季と仁和寺文化圏」では、これまで仁和寺文化圏に取材したものと考えられていた説話の中で、疑問が残されているのに、具体的な検討を経ることなく済まされていた魚虫禽獣篇第六九七話の読解を行う。すると、実は、この説話は、仁和寺御室をもまきこんだ神護寺の経営権をめぐる対立の中で作られ、語られていた説話であったことが分かる。結果的にはあるが、先行研究での指摘は正しかったのである。また、この説話の背後を探っていくと、先行研究では注目されずにいたが、延慶本『平家物語』の成立基盤にも及ぶ問題が見えてくる。

第二章「橘成季と後鳥羽院周辺」では、後鳥羽院に近侍し、一種の私兵的役割を担ったような

人物が、『著聞集』の有力な取材源であった可能性を検討する。具体的に説話中に取材源が明示されているわけではないが、『著聞集』に散見される後鳥羽院関係説話のうちいくつかは焦点を当て、具体を見ていくと、後鳥羽院に近侍していたものでなくては、まず知らない類の情報が見出されるのである。

また、後鳥羽院に近侍した者とその周辺の世界を探っていくと、実は『著聞集』と『十訓抄』との接点が見えてくる。周知の事実であるが、『著聞集』全七二六話のうち、計八十話は、一旦の成立の後に何者かの手によって追記されたもので、そのうち約四分の三、計六十話は、『十訓抄』からほとんどそのまま引用された説話だったことが指摘されている。これまでの『著聞集』研究では、説話追記は後人の所為と決めつけられほとんど顧みられることはなかったが、後鳥羽院周辺との成季との交流を探ると、その交流圏の範囲で追記が行われた可能性に加え、編者自身による追記であった可能性までもが考えられるのである。

これまでの取材源研究では、説話収集のことが論じられるのみであった。しかし、取材源とは、とりもなおさず成季の交流圏である。そうした交流圏から考察を進めていけば、単に説話収集のみでなく、編纂や追記についての知見も得られる。ここであえて後鳥羽院周辺に注目したのは、そうした編纂の問題につながる交流圏の一例として、適していると考えたからである。

第二部は「説話集の編纂と再編纂」と題し、収集された説話が、いかなる編成のもとにまとめあげられ、一つの説話集として成立するに至ったのかを考えていく。説話はただ集まるのみで説話集になるわけではない。編者によって選別・配列されてはじめて一説話集として成立する。

第一章『古今著聞集』の編目と説話分類について』では、『著聞集』を構成する全三十の篇目が、いかなる世界観・価値観によって設定されたのか、様々な経路から集められた説話がいかなる理解・認識のもとに各篇に分類されたのかについて考えていく。篇目から編者の世界観・価値観を探る試みは既に存在し従うべきところが多いが、『著聞集』の篇目の第一が神祇で、第二が釈教であることに注目し、そこに成季の独自性を認めている点に関しては、疑問である。神祇を釈教に先行させるのは、律令や格式・式目には共通して見られるものであるし、また説話集や類書、歌論にも広く認められるものであった。つまり神祇が釈教に先行していることも、『著聞集』の特徴などではなく、その当時において共有された枠組みを利用しているだけなのである。『著聞集』編者の個性は、篇目からほとんど見えてこない。

また説話の分類からも、似たようなことが指摘できる。『著聞集』には仏教関係の説話が散見す

るのだが、その全てが釈教篇に入っているわけではなく、興言利口篇や魚虫禽獸篇に分類されている場合がある。しかもそうした釈教篇以外に分類された説話に目を向けると、仏教に対する批判的姿勢や、あるいは神祇信仰と仏教的思想との相克といった、ともすれば教理・教義の問題とも関するような仏教上の重大な問題を孕んだものが存在することが分かる。にもかかわらず、そうしたことに興味を示すことなく、単に笑い話や動物の話として、釈教篇以外に分類してしまうあたりに、成季の仏教からの遠さが見えると考える。成季にとって、仏教の教理・教義などは興味の対象外、あるいは理解の対象外だったらしい。そうした点でも、成季は傑出した知性とは言い難い。

しかし、篇目の無個性や、説話への理解度といったものは、『著聞集』の価値を下げるものではない。説話集とはそもそも、たくさんの説話をストックされているということに何よりも価値があったようだ。そのことは、ほとんど『十訓抄』などからそのまま説話を引用しただけの『東斎随筆』のような説話集が広く読まれ、賞玩されていたということを考えれば、了解されるものと思う。つまり説話が編纂され、享受されていた時代では、現代とは異なり、説話集の個性といったものが重視された形跡はほとんどなく、説話の集積体、知の集積体であるという点にこそ、説話集の価値が認められていたらしいのである。

第二章『十訓抄』からの追記にあたっての本文改変、続く第三章「追記説話と『古今著聞集』の編成」では、現在伝わっている『著聞集』諸本に共通して見られる追記説話について考えていく。現在の『著聞集』研究では、「追記は『著聞集』の編成をまるで理解しない後人によってなされたもの」と理解されているが、それは全く不適であり、追記説話の実態から大きくかけ離れている。

まず『著聞集』の追記説話のいずれからも、追記が編者ではないという証拠は見出せない。『著聞集』に原則として認められる年代順配列を乱していることなど根拠とされてきたが、それは一旦の成立を見た『著聞集』の余白や紙背に、あるいは紙を継ぎ足したりして追記を行っていたという状況を示すものでしかない。

そして、ここで何より強調しておかねばならないのは、これまで『著聞集』の編成をまるで理解しないとされていた追記説話は、実はその具体に目を向けると、『著聞集』の篇目・叙述形式、さらには編者の生きた時代まで十分に理解した上で、建長六年十月に一旦の成立を見た原『著聞集』の編成の枠組みから逸脱しないよう、緻密な配慮が払われた上でなされたものであったこと

が分かる。つまり追記説話の実態は、これまでの理解とは真逆だったのである。こうした原『著聞集』編纂行為の延長線上からはみ出ないよう努めてなされた追記を「再編纂行為」と捉え、追記を含めた総体として『著聞集』という説話集を捉える必要のあることを提示していきたい。

第一部から第二部までは『著聞集』に焦点を当ててきたが、第三部「説話とイメージ」では、中世における文字資料・絵画資料にまで広く目を向けて考えていきたい。とはいえ、研究方法としては第一・二部と別に変わることはない。結局のところ、具体的に拘っての読解である。ここで主として扱うのは、これまでの研究の中で一応は関心の対象となっておきながらも、十分な検討が加えられることなく、不十分なままで済まされ、むしろ正しい理解を阻害しているとも言うものについて見ていく。

第一章「鼻のイメージ—笑いと畏れ—」では、特徴的な鼻がいかなる眼差しで捉えられていたかを考える。これまでは赤鼻や大鼻はもっぱら笑いとのみ結び付けて理解されていたが、それでは特徴的な鼻の全ての例について説明を付けることができない。実は特徴的な鼻は、平均から逸脱する一種の「異形」として、笑いの対象ともなる一方で、畏怖の念が抱かれる場合もあるものだったのである。そういった鼻に対するイメージを十分に理解することによって始めて、なぜ日本神話の中で猿田彦の鼻が巨大なものと記されるのか、なぜ天狗の鼻は赤くて大きいのか、なぜ絵巻にはしばしば特徴的な鼻の人物が描かれるのかといった、叙述の背景にある意味、視覚芸術上の表現方法の意味といったものについても解明することが可能となる。

第二章「中世散文に見る嗄声」では、「嗄声」という一表現に拘って考察を行う。これまで「嗄声」は「神霊・妖怪の声」と理解されていたが、諸例を窺うと、主に「老人の声」を指す表現であったことが分かる。そしてこのことを正しく理解できていなかったために、これまで覚一本『平家物語』に見える「嗄声」という表現が、実は、ただの文飾等ではなく、覚一本の構成に関わる重要なものであったことが見落とされていたのである。このように微細な部分にあえて拘って考えていくことで、『著聞集』に限らず、軍記などが成立する上でいかなる意識が働いていたのかを窺うことができる。

以上、三部七章から本論文は成る。

学位論文審査結果の要旨

1 この論文の意義

本論文は、日本古典文学中に1ジャンルを形成する〈説話集〉について、その成立に関わる諸問題を考察したものである。具体的には、鎌倉時代十三世紀に橘成季が編纂した『古今著聞集』二〇卷三〇篇を主たる対象に、編者がどのような経路から説話を採録し、それを如何に編集・体系化しようとしたかを論じる。あわせて、個々の説話の背後を成す文化状況の解明を目指し、話中の「鼻のイメージ」と「嗄声」の含意について、広く中世文献や絵画資料を参照しつつ考察を加える。

如上の論考は、〈説話集〉を構成する個々の〈説話〉を、当代の文化状況において正しく読解し、その生成・伝承圏の究明を試みると共に、〈説話集〉として一書を成す際の編纂行為の実態を問うものと了解される。これらの論点は、日本中世の〈説話集〉を包括的に理解する上で、いずれも欠くことのない課題である。事実、研究史の分厚い『今昔物語集』等の諸作においては、既に一定の学的蓄積が存するが、『著聞集』の場合は近時研究がやや停滞ぎみで、今後の論議の活性化が望まれるのが現状である。

本論文は、そんな学的欠落を埋める意識を以て、従来看過されてきた『古今著聞集』に関わる諸問題を考察し、説話集編者と編纂行為を巡る問題に新たな知見を提示するものとして、その意義を評価出来る。

2 この論文の概要

この論文は、以下の三部全七章から成る。

第一部	第一章	橘成季と仁和寺文化圏
	第二章	橘成季と後鳥羽院周辺
第二部	第一章	『古今著聞集』の篇目と説話分類について
	第二章	『十訓抄』からの追記にあたっての本文改編
	第三章	追記説話と『古今著聞集』の編成
第三部	第一章	鼻のイメージ—笑いと恐れ—
	第二章	中世散文に見る嗄声

第一部は「説話の取材源」と題され、個々の説話の読解・分析をもとに、編者橘成季が真言宗仁和寺文化圏、あるいは後鳥羽院に仕える近習層から、説話の取材を行った可能性を論じる。第二部「説話集の編纂と再編纂」は、類纂説話集とされる『著聞集』の篇目の立て方が、類例の多い通有性の高いものであったことを論証（第一章）、また『十訓抄』からの抄入・追記説話について再検討し、それが十分な配慮が成された「再編纂」行為の結果であったと指摘（第二章）、さらに「裏書」の本文化についても、同様の位置づけを試みた（第三章）。第三部「説話とイメージ」は、『今昔物語集』や『平家物語』に視点を広げ、話中で言及される「鼻」や「嗄声」について、当代に共有された両義的イメージを、文献資料や絵画資料に即して論証した。

3 この論文の評価

以上、本論文においては、先行研究が丁寧に収集・披見され、その批判的検討を経て一定の新見が提示されたものと評価される。ただ、その全てが学界の賛同を得て、共通理解

となり得るかは、今後の検討が俟たれる。しかし〈説話集〉成立の問題について、従来軽視されがちであった『古今著聞集』の現形態に再検討を加え、新たな視点を提示し得たことは確実に評価出来る。以下、審査基準に基づく評価を行う。

1) 研究テーマが絞り込まれている。

本論文の研究対象は、日本中世の〈説話集〉である。近時、説話・説話集研究は、新資料の報告等を軸に拡散傾向にあるが、敢えて研究対象を、早くから知られた『古今著聞集』に定め、追記説話や裏書説話をも精読することで、看過されてきた問題を掘り起こし、よく新見を提示している。本論文で得られた見解は、広く〈説話集〉の改編や〈再編集〉の問題、さらには異本輩出の問題についても、示唆を与えるものである。そのことを意識化した上で、本論文では『古今著聞集』と編者橘成季の周辺に、よく研究テーマが絞り込まれている。

2) 研究の方法論が明確である。

本論文は、『古今著聞集』という異本・異文の比較的少ないテキストを対象に、出典や類話、さらには周辺史料と細かく読み合わせ、本文の正しい把握に努めるものである。これは、日本文学研究の王道をいく方法と言える。加えて研究対象の性質上、歴史学や美術・民俗学等の周縁諸学の成果に学び、テキストの背後にある当代文化を把握しようという姿勢も顕著で、説話・説話集研究に要請される学際的方法論をも、よく踏まえた研究成果と認められる。

3) 先行研究についての調査が十分に行われ、その知見が踏まえられている。

論文全篇にわたって、先行研究についての調査が丁寧に行われ、その論述内容をひとたび対象化して摂取した上で、批判的検討を加えることで論述がはかられている。その調査対象は、日本文学研究の範囲に留まらず、日本史・美術・民俗学等の周辺領域に及ぶもので、説話・説話集研究における学際的視野の必要性を窺わせる論と言える。

4) 結論に至る議論の展開が十分な論拠に支えられ、かつ論理的である。

本論文は、大きく三部構成を採り、それぞれ異なる視角から説話・説話集研究にアプローチしたものである。第一部は、説話内容の分析から、実像が不明確な編者橘成季の説話取材源を推論したもので、いくつかの先行研究の方法を踏襲しつつも、論拠を明示して新見を提示している。第二部は、ひとたび〈説話集〉ジャンルから視点を広げ、『古今著聞集』篇目に近い構造を持つ書物を具体的に指摘、その世界分節法の通有性を明確に指摘している。第三部は、特異な「鼻」の形象や「嗄声」の意味するものを、多くテキスト・絵画の実例を掲げることで、両義的イメージの実態を記述している。以上三点において、本論文の議論の展開やその論理性については、一定の水準に達していると認められる。

5) 当該分野の学術研究の進展に貢献する、独創性を備えた内容である。

本論文が主たる考察対象とする『古今著聞集』は、日本古典文学大系刊行時（1966）に集約的に示された永積安明氏の周到な論考によって、多くの問題が尽くされたと考えられてきた。とりわけ、その際に認定された追記・抄入説話については、編者橘成季の与り知らない後人の手になるものとして、軽視・無視される傾向があった。本論文第二

部は、そのような研究状況に一石を投じ得るもので、成季本人による追記の可能性の検討も含めて、今後の議論の活性化が期待される。この論点は、『著聞集』一書に留まらず、広く説話集の改編・再編集の実態理解の一助ともなり得るもので、当該分野学術研究の進展に貢献するものと評価出来る。

4 審査委員会の結論

以上、本論文は説話集成立に関わる諸問題の考察を目指し、先行研究の調査と批判的検討を基礎に、周辺諸学の成果にも学びながら、著者独自の構想を論理的に展開・記述したものと認められる。もとより結論のすべてが、的を射た新見として受け入れられるか否かは、今後の検討・評価を俟つべきではある。しかし本論文が、近時やや停滞気味の『古今著聞集』研究を活性化し、さらには説話集編纂に関わる諸問題を議論する問題提起の論となることは疑えない。この点を高く評価することによって、本審査委員会は全員一致で、本論文が本研究科言語文化学専攻の博士論文審査基準をすべて満たし、博士(言語文化学)の学位取得にふさわしいものであると結論づけた。